

一九二八年十一月三日の事

— 志賀直哉と藤枝静男・平野謙・本多秋五 —

谷口幸代

はじめに

ここで取り上げる三人の文学者は作家藤枝静男、批評家の平野謙と本多秋五である。本多の甥にあたる小堀用一朗の『三人の「八高生」』（鷹書房弓プレス 平成一〇・一一）は、この三人の幼年時代から死にいたるまでの友情の物語を丹念に掘り起こした労作である。

小稿では同書に導かれながら、彼らの出会いと志賀との出会いという二つの出会いを同時代史の中に置いて考える。そこから彼らが志賀直哉に傾倒し、志賀と彼の文学を理念的な父として出発していく道筋をたどっていく。それによって、昭和文学、特に戦後文学で三人三様の活動を果たした文学者たちが志賀とその文学の影響を受けて、どのようにそれぞれの文学の世界に入っていくのかを確かめたい。

三人が初めて出会ったのは旧制第八高等学校である。第八高等学校は、周知のように、明治四十一年、旧制高校最後のナンバースクールとして誕生した。この八高の歴史は『八高五十年誌』（八高創立五十年記念事業実行委員会 昭和三三・一二）、『瑞穂丘物語』（八高創立

六十年記念事業実行委員会 昭和四三・一〇）、『伊吹おろしの雪消えて』（財界評論新社 昭和四八・八）や『やまはるか くもうかび 八高創立九十年祭記念誌』（八高創立九十年祭実行委員会 平成一二・一二）等で同窓生が熱烈な思いを寄せて書いている。校舎が建築されたのは現在の名古屋市立大学の山の畑キャンパスに位置していた。

当時の面影を今に伝えるのは、まず「八高古墳」と呼ばれる前方後円墳であり、次に大蘇鉄がある。私も初めて本学を訪れた時には思わず目を瞠ったものである。この大蘇鉄は、八高創立当時、近世日本文学研究の開拓者である藤井乙男が寄贈したものである。藤井は東京帝国大学国文科在学中に一級後輩の正岡子規にすすめられて俳句を始めた。以後、紫影と号して句作にはげみ、子規の俳句革新運動を助けた。教育者としては、明治三十一年から四高教授となり、四十年から八高に移った。四十二年に、幸田露伴が去った後の京都帝国大学に移る際に記念として残されたものである。この蘇鉄は昭和二十年三月の空襲で、黒焦げになったというが、その後玄関前から教養教育棟前に移植されて現在に至っている。そのほか構内に建てられた八高生の像が八高と本学とのつながりを今も伝えているところである。

卒業生には、文系ではたとえば作家の阿部知二、国文学者の久松潜一や風巻景次郎、英文学者の本多顯彰、独文学者の川村二郎、哲学者の梅原猛、西洋史家の尾鍋輝彦、民族学者の大林太良らがいる。また旧制松本高校の名物教師として知られる蛭川幸茂をはじめとして様々な分野の人々が出ており、枚挙に暇がない。蛭川の『落伍教師』（中

一九二八年十一月三日の事

林出版 昭和四二・五)には、辻邦生や北杜夫らが教え子として登場する。『どくとるマンボウ青春記』(中央公論社 昭和四三・三)は同書と対をなし、私が大学時代に松高時代の様々な追憶を伺った恩師が両著に登場している。小稿はこの追憶の青春記に触発されて生まれたものである。

一 三人の出会いとその時代

前置きが長くなったが、学習院で志賀が武者小路実篤らと出会い、白樺派が生まれたのと同じように、この第八高等学校でも一つの出会いが果たされた。大正十五年四月、三人の新入生が入学した。一人は、静岡県志太郡藤枝町の生まれで成蹊学園出身の勝見次郎、のちの藤枝静男である。一人は、京都市上京区の生まれで岐阜中学出身の平野朗、のちの平野謙である。そして、もう一人は本多秋五で、彼は愛知県西加茂郡の生まれで、愛知県立五中出身であった。勝見は理科乙類で、後の二人は文科乙類の学生だった。

前掲の『三人の「八高生」』に詳述されているように、彼らはそれぞれ繰り返し自分達の出会いと青春について回想している。平野に『回想・北川静男』(北川重夫編『光真美』昭和五・一二 『平野謙全集』一三巻所収)、『三十六年ぶりの旅』(『明治大学新聞』昭和三八・一一・一四 同二三巻所収)等がある。本多には『八高時代の平野謙』(『新選現代日本文学全集 三八』付録 筑摩書房 昭和三五・七

『本多秋五全集』八巻所収)、『八高時代の藤枝静男』(『浜松百撰』昭和四〇・二 同二〇巻所収)、『藤枝静男のこと』(『現代日本文学大系 四六』月報 筑摩書房 昭和四七・一二 同二二巻所収)、『昭和六年前後の藤枝静男』(『藤枝静男著作集 一』月報 講談社 昭和五一・七)等がある。そして藤枝に『奈良公園幕営』(『風報』昭和三二・七 『藤枝静男著作集』一卷所収)、『古本屋ケメトス』(『中部日本新聞』昭和三四・一一・一八 同五巻所収)、『平野断片』(昭和三六・三執筆、未発表 同五巻所収)、『本多秋五』(『群像』昭和三九・一〇 同五巻所収)、『落第仲間』(『静岡新聞』昭和四四・一・一 同三巻所収)、『救世主K先生』(『文芸春秋』昭和四五・五 同二巻所収)、『青春愚談』(『東京新聞』昭和四六・七・二七・九・一 同五巻所収)、『昭和五十年』(『静岡新聞』昭和五〇・一・三 同三巻所収)等がある。また小説でも『春の水』(『群像』昭和三七・四 『藤枝静男著作集』五巻所収)、『或る年の冬 或る年の夏』(『群像』昭和四四・四、四五・三、四六・八 同五巻所収)などで八高時代を題材としていることはよく知られ、『空気頭』の初稿(『近代文学』昭和二七・三 同六巻所収)では「平形研」「本堂春吾」という二人の名前をもじった経済学者を登場させている。

これらによれば、教室内の順序は成績順ではなく五十音順にうしろから座席が並び、ヒ―平野、フ―藤岡、ホ―本多の順だったという。また寮では藤枝と平野とが同じ南寮五室、六人一室のひとつ机の向かい合わせの席だったという。大正十五年度の寮生名簿(『第八高等学

校寮史』第八高等学校寮 昭和一一・七)で三人の名前を探してみる
と、第五室に「理科一年乙 勝見次郎」、「文科一年乙 平野朗」、第
十二室に「文科一年乙 本多秋五」とある。当時八高には南・北・中
と三棟の学寮があった。そのうちの南寮の一階第五室に藤枝と平野が、
五階の第十二室に本多がそれぞれいたことである。こうした環
境のもと、二年生になってまず平野と本多が親しくなり、平野が本多
に藤枝を紹介し、生涯にわたる三人の交流が生まれていくことになっ
た。

次に彼らの出会いがどのような時代に果たされたのかを地元紙の報
道や学校史を手がかりに確かめておきたい。前述したように、三人が
入学したのは大正十五年四月である。旧制高校の入試選抜方式が繰り
返し改変されたことは秦郁彦『旧制高校物語』(文春新書 平成一五
・一二)で整理されているが、三人もまた改変の騒動のただ中に入学
した学生だった。大正十五年度より全国の高等学校二十五校を甲乙二
つのグループに分ける二班制試験制度が実施されたからである。

たとえば、同年四月九日の「新愛知新聞」に「入学者の発表が遅れ
て 授業にも差支へる 高校入学試験制度の改正に 校長連口を揃へて
反対す」という見出しの記事が掲載されている。この記事に並んで、
「モミにモンだ 高等学校入学者 八日夜ヤット発表」という見出し
で、合格発表の選考が長引いたため、七日までに予定されていた文部
省の発表が八日になったこと、及び八高、一高、浦和、福岡の四校は
さらに九日発表に延期されたことが報じられている。

また、彼らは入学のその年に大正から昭和へという時代の移り変わ
りを体験することになった。藤枝は『昭和五十年』の中で、入学早々
一学期の成績が散々で、二学期は奮起してもちなおさねばならない状
況であったと回想している。しかし、試験の始まる十二月十日頃から
天皇御不例の報道が急に高まってきて、状況次第では試験が中止にな
るかと思念が浮かんだりして、結局勉強が手につかず、もはや翌年三
月の落第は必至とあきらめながら憂鬱な荷造りをしていたという。

十二月二十五日に昭和と改元、明けて昭和二年の十一月に昭和天皇
の愛知県への初めての行幸が行われた。十四日の「名古屋新聞」には
「けふの御日程」として愛知医科大学、名古屋高等工業高校を経て、
八高への訪問予定も挙げられていた。午前十一時二分に到着、その後、
小松原隆二校長先導で御座所に入御、校長と勅任教授の拝謁、校長名
簿等の贈呈とここまでで約五分、陳列場に場を移して約十六分、その
後運動場で生徒らに拝謁し、十一時三十二分に玄關で乗車、と刻み
のスケジュールが紹介されている。主な天覧予定品には、入学志願者
及び卒業生概況、教科書から始まって植物細胞染色体の顕微鏡写真、
動物発生標本十三種、八高製作の機械模型などが挙げられている。

翌日の「名古屋新聞」は「生物学に対して特に深き御理解 熱心に
顕微鏡を御使用 八高、高商を御巡覧」との見出しでこの時の様子を
報じている。当日は予定より若干遅れて十一時五分に到着、陳列場で
柏木(物理)、河村(地質鉱物)、高嶺(植物)、河合(化学)、河野
(動物)、溝口(図画)各教授による説明が行われ、特に三河地方特

一九二八年十一月三日の事

産の菌根タヌキモなどの花粉母細胞の顕微鏡に關心を持たれたという。同月十五日の「新愛知新聞」夕刊に校旗を掲げて天皇を迎える八高生たちの姿をおさめた写真が掲載されている。昭和三年六月二日の「名古屋新聞」には、この行幸の記念事業として八高の図書部の改善が行われることになったと伝えている。現在でもこの行幸記念碑が構内のテニスコート東側に残されている。

さらに三人の在学時期が八高にとつてどのような時期であつたかを確かめてみると、昭和三年は創立二十周年という記念の年であつた。『伊吹おろしの雪消えて』によると、五月三十日から六月三日まで盛大に記念祭が挙行された。記念祭の行事は三十一日の朝は生徒一同熱田神宮に参拝し、昼は覚王山で物故卒業生の追悼会、夜は県会議事堂で記念講演会と続いた。三日午後には仮装行列が行われ、在校生たちは校外へとあふれ出し、栄町交叉点でデカンショ節を歌い、街頭でいわゆるストームをし名古屋駅前で解散したという。

「名古屋新聞」同年五月三十一日の「八高生れて廿年　きのふの記念式」には「各級、各部が頭をしぼつた造り物や盛沢山の催しものゝふたを一時にあげてあつといはせようと八百余のもさ達が意気こんである」と八高生の勇ましさを伝えている。

このストームはドナルド・T・ローデン『友の憂いに吾は泣く　旧制高等学校物語』上巻（森敦監訳　講談社　昭和五八・四）でも興味をもって取り上げられているように、これは明治二十八年頃一高で始まったといわれ、その後地方の高校に瞬く間に広がったとされる旧制

高校特有の慣習である。学生たちが円陣を組んで、寮歌を歌ったり、踊ったりし、また街中に出る時には列を組んで歌ったり、うなったりしたもので、この大騒ぎを「儀式」と称して行つたものであつた。前掲の秦郁彦『旧制高校物語』は中でも八高のストームの頻度と猛烈さは有名だったと紹介している。『伊吹おろしの雪消えて』にも街頭ストームの写真が掲載されている。

最も典型的なのが「入寮歓迎ストーム」と呼ばれたものである。ローデンは新入生の男らしさを試すために行われるもので、それまでの家族への依存心を捨てさせ、共同体の中で心理的に結びついていくべき欲求を培う新入生にとつて最初の試練であつたとしている。まさに「バンカラ」という旧制高校の美学を象徴したものである。藤枝の『青春愚談』にも「入寮早々の一年生が出会うものが、夜のストームと寮歌練習、それから放課後の入部勧誘であつた」という一節があることから、恐らく彼ら三人もこのストームの洗礼をたつぷりと受けたことが推測される。

二 志賀直哉との出会い

三人を強く結びつけたのが文学への関心であつたことは、『三人の“八高生”』に述べられている通りである。平野は佐藤春夫、本多はトルストイ、藤枝は志賀直哉というようにお互い最良の作家は違つたものの、共に文学を愛する者として彼らは、学校生活の中でさかんに

文学談義を交わしていた。

『伊吹おろしの雪消えて』に収録された「校友会雑誌」の目録に三人の名前が見える。発行順に抜き出してみると、五十一号（昭和二年十月発行）に平野朗『晩秋挿話』、勝見二郎『考へる事』、本多秋五『死と芸術』、五十二号（同年十二月発行）に勝見二郎『奈良行き』、五十七号（昭和三年七月発行）に勝見二郎『兄の病氣』、五十九号（昭和四年三月発行）に平野朗『我が家の平和』、六十号（同年五月発行）、六十三号（同年十一月発行）に平野朗『稚恋』、六十五号（昭和五年三月発行）に平野朗『昨日の風景』とある。また昭和三年度の委員を本多と平野、翌年度の委員を平野がつとめている。

また彼らは在学中に推理小説雑誌「新青年」に『古本屋ケメトス』という探偵コントを投稿したこともあった。このコントをめぐる経緯は前掲した藤枝の『古本屋ケメトス』という同タイトルのエッセイから窺うことができる。彼らのコントは平野がストーリーを作り、藤枝が書いたもので、学校近くの古書店「オリオン」とその若夫婦を描いたものだったということである。

こうして彼らが文学への関心を第一の共通点として友情を深めていった三人の八高時代は、ちょうど昭和文学の始まりに位置していた。芥川龍之介が「将来に対するぼんやりとした不安」という言葉を書き残して自殺したのは、昭和二年七月二十四日のことであつたが、当時、プロレタリア文学やモダニズムの文学など新しい時代を予見するような新しい文学が次々と生まれてきていた。この大正文学の担い手芥川

の死から実質的な昭和文学の幕が開けられていく。

本多の『八高時代の平野謙』の中に次のような一節がある。

（略）県庁内の大きな建物のなかで、改造社の「現代日本文学全集」のPRのための《文芸大講演会》が催された。名古屋になに大勢の文士がそろつて来たのは初めてのことでなかったらうか。横光利一が禅の話を例にして新感覚派文学論をのべた。ちんぷんかんぷん、さっぱり判らなかつた。久米正雄が「前説」と断つて講演し、文士の生活を写した映画をみせた。白い顔の山田順子が、リンゴの皮をくるくると剥いて、徳田秋声にさし出した。芥川龍之介が着物姿で庭木にのぼり、それをカメラがあちこちの角度から写してみせた。

ここで言及されている講演会は、いわゆる円本の先駆けとなった『現代日本文学全集』の発刊を記念して、昭和二年五月十五日に改造社の主催で行われた「現代日本文学全集講演会」である。

翌日の「新愛知新聞」によると、午後六時半から始まったこの会は、開会の辞の後、まず木村毅が「文学界の女性観」と題して「モダンガール」の心理を論じたという。ついで横光利一は「聯想作用」と題して「西洋における主観の思想傾向と東洋に於る客観強調の思想潮流を指摘しつつ主観と客観の合一する時最後の文化が実現する」と説いた。また藤森成吉は「戯曲と変遷」との題で戯曲に表れた思想的な変化の過程を追いかけて、吉江喬松は「文学の使命」について論じた。最後に久米正雄が自身で撮影した「現代作家の生活」の映像や国木田独歩原

一九二八年十一月三日の事

作の『女難』の映画等を映写して十時に閉会となったという。同日の「名古屋新聞」もまた「素晴らしい盛況、大盛況 聴衆尚潮の如く 県議事堂の大門遂に閉づ」という記事を載せ、「まだ、日のおちつくさない頃から陸続としてつめかけた聴衆は定刻六時半には既に三千堂にみちて空前の盛況を見せる」、「聴衆は後から／＼押よせさしもの大会場も身動きすらできない有様」、「日頃文学書でしむ文学者の生活がスクリーンに現れるや聴衆の喜びは極度に達し拍手につぐ拍手を以て迎へ」たという臨場感あふれる描写に、満員の聴衆の写真を添えて会場の熱気を伝えている。

この満場の聴衆の中の一人だった本多はわずか二ヵ月後に自殺することになる芥川の映像を見、横光利一本人から新感覚派の文学理論を聞くというまさに新旧文学の交代劇を体験したことになる。

しかしながら彼らの八高在学中の「最大の文学的事件」『八高時代の平野謙』はこうした新しい文学との出会いではなく、志賀直哉との出会いであった。後に改めてふれるが、この『現代日本文学全集』の二十五巻（改造社 昭和三・七）は『志賀直哉集』として編まれ、『暗夜行路』前編、『或る朝』、『網走まで』、『濁った頭』、『和解』など四十八作品を収録している。

昭和三年八月二日に藤枝がまず志賀を訪ねた。当時、志賀は奈良に住んでいた。この奈良時代、あるいはその前の京都時代の志賀のもとを訪れるものは少なくなく、たとえば大正十二年には滝井孝作が京都に移り住んだほか、尾崎一雄、網野菊、谷川徹三、竹内勝太郎ら

六

の訪問があり、奈良に移った志賀を慕って網野や尾崎が住まいを移している。また昭和六年には小林多喜二が志賀家を訪れ一泊している。藤枝は前もってこの日の午後二時に訪ねる約束を葉書で取りつけていた。この時の様子は藤枝の『志賀直哉・小林秀雄両氏との初対面』（『風報』昭和三・四 『藤枝静男著作集』一卷所収）等にある。

当時、志賀は四十五歳であった。大正十一年に『暗夜行路』前編を刊行、翌年には関東大震災を機に同人誌「白樺」の終刊と、彼の文学活動の上で、大きな節目を迎えていた。同年に京都へ、さらに十四年に奈良に住居を移してからは、東洋美術への関心を深めていく。その審美眼によって選り抜かれた作品を編集し、同十五年六月に美術図録として『座右宝』を刊行した。

この時、志賀は小説と絵が好きだという藤枝のために、中国清の画家石濤の風景画から始まって梅原龍三郎、山脇信徳、有島生馬ら交遊のある画家の作品にいたるまで披露したという。複製画による美術鑑賞は若き日の志賀たち白樺派の人々が流行させた鑑賞形式であったが、この時は実物による豪華な鑑賞であった。

また藤枝の『「座右宝」のことなど』（『志賀直哉全集』月報九 昭和四九・一 『藤枝静男著作集』一卷所収）によると、藤枝は存在を知ってはいいたが、実物を見たことはまだなかった『座右宝』を編者本人から「親切な説明つき」で見せてもらったという。六十八円の「並製」の方で、そして私は氏が書斎からわざわざ出して来られた何枚かの原版の焼き付け写真をも混えて拝見したと覚えている」と振り返って

いる。

拙稿「志賀直哉と俵屋宗達」(名古屋市立大学人文社会学部研究紀要「平成一五・一一」)で述べたように、この『座右室』は志賀が東洋美術へ関心が移った当時の関心の置き所をそのまま豪華版の図録としたものである。この『座右室』からさらに編集の観点を進めて、志賀は『樹下美人』(河出書房新社 昭和三四・六)では西洋の古典美術から現代美術、さらに日本の現代絵画まで収録し、志賀の美術観の集大成となっている。こうした後の展開を踏まえると、昭和三年八月段階で藤枝は『座右室』とともに、梅原や有島ら日本の現代絵画を鑑賞しており、『座右室』から『樹下美人』への予兆が既にここにあったことがわかる。

この約三ヶ月後の十一月二日、藤枝は再び志賀を訪ねる。今度は藤枝が案内役をつとめ、平野と本多も同行し、宿代を浮かすため山岳部から借りたテントでの野営を試みた。藤枝はこの時の訪問の様子についても自身の日記を元に『奈良公園幕営』といったエッセイや『青春愚談』等で詳しく記している。前述のように平野は佐藤春夫最真、本多はトルストイ最真であったことや、「藤枝の主導」で連れて行かれたと本多が述べていることなど考えて、二人にとってこの旅行は恐らく奈良見物がてら志賀の家でも見られたらいいという程度の軽い気持ちからのものだったかも知れない。

藤枝は初日の二日は、時間が遅かったためもあってか、一旦一人で志賀の家に挨拶に訪れている。翌三日に志賀は三人が張ったテントを

見てきたと藤枝に伝えている。四日に今度は三人そろって志賀宅を訪問し、志賀から自分もいつか「原始生活」をやってみたいという言葉聞いた。またこの日にも志賀は再びテントを訪ねて来ている。志賀の気さくさと好奇心の強さと彼らに寄せた親愛の情のあたたかさが伝わってくるのである。

三ヶ月前の藤枝の志賀訪問が美術鑑賞の豊かな時間を共有するという意味で白樺派的なものであったとすれば、今回の三人の志賀訪問は若者のテント生活から自ら自然の中で生活したいと願う志賀の率直な人間性や健康的なたくましさにふれたという意味で、これもまた白樺派的なものであったといえるだろう。こうして三人は五日にテントをたたき、志賀に借りた蓆と毛布を返却してから無事名古屋に帰った。

同行者であった平野謙は後に、「いま志賀さんの年譜をみると、当時の志賀さんは現在の私どもより、なんと十歳ほど若いのである。以来、私は志賀さんにお目にかかったことがないが、いまでも、あのときの志賀さんは現在の私などより老成した印象がつよい。」(『三十六年ぶりの旅』)と回想しており、この志賀との一度きりの出会いが強い印象を残したことが窺える。一方の本多もまた「この旅行以来、三人だけにわかる共通の経験をもったことによって、ぐっと強く結び合わされたと思う」(『藤枝静男のこと』)と述べている。

以上のように、三人の八高生は志賀直哉その人と出会い、その出会いを共有することによってさらに友情を深めていった。ここから、それぞれの文学への道のりが始まっていく。

一九二八年十一月三日の事

八

三 その後の三人と志賀直哉

この後の三人が歩んでいった道のりを追っていくと、それぞれ志賀の文学と関わりながら文学活動を展開していったことが確かめられる。かつてロダン（花子）の故国の青年である志賀たち無名の作家にブロンズ像三点を贈り、白樺派のメンバーが大きな影響を受けた。それと同じように、今度は大家となった志賀が八高の文学青年たちをあたたく迎え、その出会いが彼らに大きな影響を与えていった。

まず本多秋五は昭和四年に八高を卒業して上京、東大国文科へ進む。大学卒業後、批評家として着実に歩みを進め、その歩みはトルストイ論から始まり、宮本百合子論などを経て百合子研究の源流を明らかにするため白樺派研究へと進んでいく。

その『「白樺」派の文学』（講談社 昭和二九・七）は、志賀、武者小路実篤、長与善郎、有島武郎らを論じ、白樺派という文学運動全体を考察したものである。これは本格的な白樺派研究の先駆的なものとして位置づけられ、それ以降の白樺派研究の大きな礎として後に続く研究者に多大な影響を与えている。特に志賀文学については「男性的な、生活建設的な、実践的な性格」、「旦那衆のリアリズム」といった表現でその特色を規定し、「想ふ」と「為す」の距離感に志賀文学成立の秘密を見出している。

また『志賀直哉全集』（岩波書店 昭和四八・五）の内容見本に寄

せた『文学における美味』の中で「私は青年時代に、文学上の美味とはどんなものかを、志賀さんによって教えられた。」と志賀文学が自分の批評活動に及ぼした影響を改めて確かめる発言を行っている。

ついで本多はこの言葉の意味を自らもう一度反芻するかのようになり、昭和五十八年五月から六十二年一月までの約四年にわたって、『群像』に『晩拾志賀直哉』を隔月連載した。これに訂正加筆して刊行した『志賀直哉』上・下（岩波書店 昭和六五・一、二）の「はしがき」は、次のように高等学校時代の記述から始まっている。

私は旧制高等学校三年間の後半に、藤枝静男の影響のもとに志賀直哉を読んで、はじめて文学に眼を開かれた思いをした。一番よく話し合ったのは文科乙類同級の平野謙で、文学書の多読ということでは彼は私よりはるか前方を歩いていたが、藤枝から志賀文学を学んだ点では、彼も私とほぼ肩を並べていたといえよう。

その後、私はプロレタリア文学への傾斜やトルストイの『戦争と平和』への没入などによって、志賀直哉から遠ざかった時期もあったが、戦後数年して、いわば文芸思潮としての「白樺」派全体のなかに位置づけて、志賀直哉を読み直すようになった。

一九六〇年代のいつか、私は一篇の志賀直哉論を書いてみたいと思いはじめた。

ここでは志賀文学によって文学に目覚めた高校時代以降、紆余曲折を経て志賀論を書きたいという気持ちに宿志となっていた経緯がたどられている。彼は人生の「残務整理の筆頭課題が志賀論であった」と

まで言い切っている。本多の志賀への関心が六〇年代以降に深まっていくことは宮内豊『反近代の彼方へ』（論創社 昭和六一・一二）が「自我」との関連で論じている。

『志賀直哉』は、志賀への思いの確認から本論へと入り、この「はしがき」の発言と呼応するように、時に高校時代の思い出を挿入しながら志賀論が展開されていく。たとえば『濁った頭』の成立論の部分でも、昭和三年、高校三年生の時に前にふれた改造社版『現代日本文学全集 志賀直哉集』でこの小説をはじめて読んだ思い出が挿入されている。また志賀作品中の〈夢〉について論じられた部分でも、高校時代に平野と藤枝とともに『祖母の為に』や『黒犬』の中の〈夢〉について語り合ったことがふれられ、さらに『和解』を初めて読んだ高校生の際に「力強く肯定的に描いている」作者の筆力に「息をのむ思い」をした衝撃は「今も確かに私の記憶にある。私はどうやらこの辺で、本能的なものは健康であるかぎり美しい、という志賀直哉の哲学にかぶれたらしい」と記されている。

中でも、『暗夜行路』の十四節と『漱石全集』推薦』との思想的な共通性を指摘する箇所は注目される。なぜなら、この二つの文章の執筆時期がちょうど本多たちが志賀を訪れた頃に当たることが述べられているからである。

平野謙と私が、藤枝静男に連れられて、奈良幸町のお宅に志賀さんを訪ねたのは、昭和三年秋、たしか十一月初めのことであったが、それは志賀直哉がこういう心境に達していた時期——もっと

正確に言えば、『豊年虫』を書き上げた直後の時期——であったことが、今にして初めてわかる。

自我は小さい、自我が後生大事に齋き祭る善悪正邪の観念も、巧拙美醜の判断も、若いときに考えたほど権威のあるものではない。もっと大きな「自然」の力、「自然」の法則がある。それに較べれば人間の営みは果敢ないものではないか。——そんなことをしきりに考えるようになっていた四五歳の志賀直哉が、その心境をストレートに吐露したのが、謙作の「涅槃とか寂滅為楽とかいふ境地には不思議な魅力が感ぜられた。」ではなかったか。

このように、本多は「人生の残務整理」としての重要命題である志賀直哉論執筆にあたって、初めて出会った当時の志賀文学を考えることによって、自分と志賀との出会いの意味付けも行おうとしているのだといえる。それは志賀文学との出会いを通して文学の道を歩むことになった彼にとって自然なことであった。

いっぽう、平野謙は、昭和五年に八高を卒業し、同じく上京して東大社会学科へ、後に美学科へ転科しながら、次第に文芸批評の分野へと進み、精密に推理小説の謎を解くように作品分析を試み、戦後文学の推進者として活躍した。それと同時に戦前の文学運動の再検討を続け、特に私小説の特色を解き明かし、昭和文学史に対する独創的な見方を提示した。つまり昭和文学の構造・枠組みを〈私小説〉、〈プロレタリア文学〉、〈モダニズム〉の三派鼎立であるとするという方である。中でも〈私小説〉を代表する作家が志賀であることは言うまでもな

一九二八年十一月三日のこと

く、平野が八高時代に志賀直哉その人に直に会った体験が、この（私小説）という問題への平野の問題意識を高める役割を果たしたことは想像に難くない。彼の代表的評論集『芸術と実生活』（講談社 昭和三三・一）は第二部で志賀とともに、森鷗外、田山花袋、島崎藤村、徳田秋声、永井荷風を論じている。この評論集のタイトルは志賀直哉の芸術作品と彼の実生活とその両方の緊張関係にふれた八高時代の思ひ出を呼び起こすものとして響いてくる。

宮越勉「平野謙と志賀直哉——『私小説の二律背反』に即して」『平野謙研究』明治書院 昭和六二・一一）は志賀文学研究家の立場から平野の志賀論の特色を分析し、たとえば『邦子』に着目した先駆者として位置づけられるとしている。また、中山和子『平野謙論 文学における宿命と革命』（武蔵書房 昭和五九・一一）は「平野謙が、むかしから私には志賀直哉論史ないし研究史には「特別な関心」がある」と語っているのは、まさに、固有の青春原体験をめぐって粘着する「特別な関心」にほかならない」と述べ、その「特別な関心」の内実を、「志賀直哉論をタテ糸とする文学的インテリゲンツィアの時代的推移を明らかにする」という晩年まで持続されたテーマであったことを説いている。平野は「志賀直哉論史ということ」（『群像』昭和四三・七）で芥川龍之介、小林秀雄、井上良雄が志賀論を発表した昭和二年から七年まで、つまり自分達が志賀を訪問した時期を志賀論史の一つのピークとして整理している。

最後に藤枝静男は、昭和五年三月に八高を卒業、この年七月には奈

良の日吉館に泊まり、一日おきに志賀を訪ねるという生活を送る。しかし、文学の道にはすぐには進まず、千葉医大へ進み、眼科の医者になった。小説家としてのデビューは戦後になってからのことである。

平野・本多らが雑誌「近代文学」を創刊、彼らのすすめで藤枝は昭和二十二年、デビュー作『路』を同誌の九月号に発表する。この雑誌は「新日本文学」と共に、戦後文学を文字通り先導していった雑誌である。平野と本多はその中心メンバーとして活躍していた。つまり、白樺派の作家が同人誌「白樺」を舞台に自然主義の暗さを吹き飛ばす新しい文学を生み出そうとしたと同じように、彼らは「近代文学」を舞台に戦後の文学を自ら生み出そうとしたのである。

藤枝はデビューの際に平野と本多に筆名をつけてほしいと頼み、つけられた名前が「藤枝静男」であった。『三人の「八高生」』に述べられているように、藤枝は出身地静岡県藤枝町によるものであるが、静男は、八高時代に腸チフスで亡くなった同級生北川静男にちなんだものとされる。本多が若い頃一時「北川静男」という筆名を用いていたこともあった。言うなれば、この「藤枝静男」という筆名それ自体が八高で培われた友情と追憶とから生まれたものであった。

こうして三人の中で最も遅く出発した藤枝は、その後志賀の小説の方法を引き継ぎながら独自の宇宙観で珠玉の作品を発表していく。高橋英夫『志賀直哉 見ることの神話学』（小沢書店 平成七・五）は藤枝の作品を「生死をひっくり返して、輪廻的な広漠たる世界をとらえた幻想的リアリズム」とし、志賀譲りの死生観とリアリズムの結合、

私小説と幻想の共存を表現していると述べている。また宮内淳子『藤枝静男 タンタルスの小説』（エディトリアルデザイン研究所 平成一一・一）は志賀の系列から藤枝文学を解き放して読み解くことを基本的な立場としているが、第五章の「崩れる石―描かれた無機物の諸相」では「よく見て描く力」の大切さを志賀訪問時に教えられ、それが彼の一生の信念となったことも述べている。こうした藤枝文学研究の現在を視野に入れながら、ここでは、彼の小説の特色を『和解』と『暗夜行路』を背景に置きながら考えてみたい。

たとえば長編小説『欣求浄土』（『群像』等に分載 昭和四一・九、四五・五）では志賀がよく揮毫した「欣求浄土」という言葉をタイトルに据え、老年期を迎えた主人公が古代の庭や巨大な樹木に強い共感を寄せながら、死というものに次第に引き寄せられていく様子が描かれている。次に挙げるのは最終章「一家団欒」の一節である。

やがて章は、かねて自分が目的としていた場所にたどりついた。それは、小さな寺の本堂のわきの軟かい毯を一面にならべたような美しい茶畑にかこまれた、あまり古くない彼の家の墓場であった。

「とうとう来た。とうとう来た」

と彼は思った。すると急に、安堵とも悲しみともつかぬ情が、彼の胸を潮のように満たした。彼は、父が自分で「累代之墓」と書いて彫りつけた墓石に手をかけて、その下にもぐって行った。四角いコンクリの空間のなかに、父を中心にして三人の姉兄が

坐っていた。二人の弟妹は、かたわらの小さな蒲団に寝かされていた。

ここで主人公は「腎臓も、眼球も、骨髓も、それから血液も、残して役にたつものだけのものは、死んだときみな病院に置いて来たので、彼の身は軽かった」とある。つまり肉体という現実から解き放たれ、墓石の下に集まる亡くなった家族と再会している。

いっぽう、志賀も『和解』で主人公順吉に墓参りをさせている。

自分は祖父の墓の前を少時歩いてゐた。其内祖父が自分の心理に蘇つて来た。其祖父に対し自分には「今日祖母に会ひに行きたいと思ふが」といふ相談するやうな気持が浮んだ。「会ひに行つたらよからう」と直ぐ其祖父が答へた。自分の想像が祖父にさう答へさしたと云ふにしては余りに明かに、余りに自然に、直ぐそれが浮んだ。それは夢の中で出会ふ人のやうに客観性を持つてゐて、自分には如何にも生きてゐた時の祖父らしかった。自分は其簡単な言葉の裡に年寄つた祖母に対する祖父の愛撫をさへ感じたやうな気がした。

この場面は、順吉が祖父や実母といった死者と語り合い、自らの血縁を再確認する場面である。この場面を背景に置けば、墓をめぐる死者との交流をさらに超現実的に描いたのが『欣求浄土』ということになる。『欣求浄土』では主人公が「父の膝にしがみつ」き、父が息子の「首のつけねのところから頭にかけて、ごわごわした厚い掌で撫でた」とあるように、会話だけではなく触感さえも描きこまれている。

一九二八年十一月三日のこと

また藤枝は志賀と同じように仏教思想や美術への関心を背景に、優れた視覚描写や風景描写の小説を発表しながら、そこに描かれた世界は、志賀が『暗夜行路』で描いたような大自然の中に解け込む一個の小さな存在としての人間という構図ではなく、自然も人間も、そして生も死も、何ら境界のない自在な大宇宙であった。たとえば『田紳有楽』（群像）昭和四九・一、七、五〇・四、五一・二）でも、志野焼きのぐい飲みや丹波などの焼き物が五十六億七千万年という途方もない時間と空間を超えて語り、そこから私小説という枠組みをこえた象徴的世界が描き出されていることから明らかであろう。藤枝は「特別インタビュー」「極北」の私小説（『文学界』昭和六〇・五）で、「離れて、しかも強く即く」という志賀の言葉を引用して、めざす文学を説明している。藤枝の小説は志賀を離れて、しかもなお強く志賀を即くものであった。

以上、三人の活動と志賀とのつながりについて考えてきた。前述したように彼らが初めて志賀を訪ねた昭和三年当時、志賀は一つの節目を迎えた後であった。より細かく述べれば、この年の六月に『暗夜行路』後編の十五を発表し、以後この長編の連載開始は昭和十二年まで待たねばならない。他の作品に目を転じて、昭和四年に『豊年虫』が発表されているものの、寡作になっている。彼らの訪問時はゆったりとした志賀文学の流れの上では休息時期に当たるといえるだろう。しかし、彼らはそれぞれの活動からこのいわば（空白）を埋めようとしているようである。本多は当時の志賀の心境と作品との関係を考え、

また志賀研究の流れを見極めることで、〈空白〉を埋めた。平野もまた前年の昭和二年に発表された『邦子』という作品に着目し、芸術と実生活の相関関係を考えることで、この〈空白〉を埋めようとした。そして藤枝はリアリズム文学という評価のもとでは〈空白〉となっていた幻想の部分を受け継ぐ形で埋めようとしたのである。

結びに代えて

最後に、昭和四十七年の藤枝の旅にふれたい。藤枝静男の「志賀直哉文学紀行 個性に貫かれた風景」（『現代日本文学アルバム六 志賀直哉』収録 学習研究社 昭和四九・二）からこの旅の様子が窺える。

この「志賀直哉文学紀行」は志賀が幼年期・青年期を過ごした麻布の屋敷跡に始まって志賀ゆかりの風景を、それぞれの場所で執筆された作品、あるいはそこを舞台とした作品にふれながら順次たどっていくものである。父との不和から家を出て一時滞在し『時任謙作』を書いた尾道、『濠端の住まい』の舞台となった松江、『暗夜行路』結末部分の舞台となった柏耆大山、『焚火』等に描かれた赤城山、そして彼らがそろって志賀を訪ねた奈良、その後に移り住んだ東京、戦後に別荘を求めた熱海まで足を運んでいる。『母の死と新しい母』で新しい母と初めて言葉をかわした喜びから主人公が「片足で二度ずつ跳ぶ駆け方」、つまりスキップをしたと書かれた広大な屋敷が、後に清泉寮学院となったことなど新しい発見が盛り込まれている。清泉女子大学の

資料からは日本舞踊や学習に使われていたこと、また港区区役所の資料からは当時の地番が麻布三河台二七番地で面積は一六八二坪、現在の港区六本木四丁目一三号―一五号に当たることなどが報告されている。

藤枝はこの麻布の志賀邸跡地を訪れた際に、庭隅で八ッ橋の残骸を偶然に見出し、「ひどく私の興味をそそった」と述べている。それは『座右宝』の「建築及庭園の部」に京都本法寺にある伝本阿弥光悦作の八ッ橋の図版が収録されていることを思い出したからだという。「氏が本法寺の美しく静謐な八ッ橋を見て心惹かれたとき、氏の心の底にはきつとこの庭隅の八ッ橋が蘇ったにちがいない、と私は空想したからであった」と説明されている。前述したように、『座右宝』は藤枝が初めて志賀を訪ねた時に見せてもらった豪華図録である。私見ではこの光悦の八ッ橋については、前掲した拙稿で述べたような宗達に対する志賀の関心との関連で考えることができるが、ここで藤枝は麻布の家の庭と結びつけている。このように志賀の心に蘇る風景を空想した時、藤枝の目に映っていたのは、眼前の八ッ橋の残骸だけではなく、『座右宝』の図版、そしてそれを見せてくれたあの日の志賀自身の姿も重なる重層的な映像だったはずである。

この旅で初めて会った志賀の姿を思い出したのは藤枝だけではない。奈良を訪れた際には本多が同行し、志賀の旧居の場所について互いの記憶をもとに探しあてている。また、尾道や松江、大山ではこの二人に平野も加わり、三人全員で志賀ゆかりの地をたどっている。これは、

八高時代からの友情を確かめ、そしてまたそれぞれの活動における志賀の意味を三人で確かめ合う旅ともなっていた。藤枝の紀行文が収録された『現代日本文学アルバム』には平野の「志賀直哉とその時代」も掲載されている。本多の『出雲の旅』（『建設だより』昭和四七・一『本多秋五著作集』一二巻所収）によれば、出雲行きが昭和四十六年の九月末から十月初めのことだったという。その直後の十月二十一日に志賀は八十八年の生涯を閉じる。この旅を綴った本多の「出雲柏耆の旅」と平野の「格別のこと―志賀直哉の死を悼んで」は「群像」の昭和四十六年十二月号に並んだ。彼らは、この旅の地点から志賀の死という〈空白〉という課題をかかえながら、それぞれの道を歩んでいくことになったのである。

※ 志賀、藤枝、平野、本多の文章からの引用は、『志賀直哉全集』全二十八卷（岩波書店 平成一〇・一二―一四・三）、『藤枝静男著作集』全六卷（講談社 昭和五一・七―五二・五）、『平野謙全集』全十三卷（新潮社 昭和四九・一二―五〇・一二）、『本多秋五全集』全十八卷（青柿堂 平成六・八―一一・二）に拠る。引用の漢字はすべて常用漢字を用いた。